谷崎先生の書簡

ある出版社社長への手紙を読む

水上勉

中央公論社

谷崎先生の書簡
ある出版社社長への手紙を読む

一九九一年三月一日初版印刷
一九九一年三月一〇日初版発行

編著者　水上　勉
発行者　嶋中鵬二
印刷所　精興社
製本所　大口製本

発行所　中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二―八―七
振替東京二―三四
©一九九一　検印廃止
Printed in Japan
ISBN4-12-001993-4

谷崎先生の書簡

――ある出版社社長への手紙を読む

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一

ここに披露する谷崎潤一郎氏の書簡は、ごく最近、中央公論社から発見された、先代社長嶋中雄作氏宛のもので、昭和二年四月四日から、二十三年四月頃まで、約二十一年間の私信である。私信であるから公表のつもりのものなどあるはずがないので、中には「このことは秘密に」云々と書かれているのもある。当然のことながら、これで、谷崎氏が嶋中氏に、出版社社長と寄稿作家の関係以上の友情をもたれ、何かと相談ごとも多かった様子がわかるのであるが、私は、現社長嶋中鵬二氏から、これら私信九十余通を見せられて、次のような依頼をうけた。

「谷崎先生の書簡は、これまで数多く公表されており、全集にも収録されているけれど、

ここにもち来ったものはすべて未発表である。また、年代からいって、谷崎先生には、ご家庭にはげしい変化が起きた年まわりで、文学的にも、いわゆる中期の名作が誕生しており、執筆で多忙をきわめておられた。書簡には、その頃の家庭のご苦労はもちろんだが、文学作品を生む苦心も、取材旅行や、その他の調査の記述ににじみ出ている。こうして、未発表のままにしておくことも惜しまれる。それで、松子夫人にご相談申しあげたところ、発表してもよいとのお許しを得たので、関西にもくわしく、また、かつて出版社にお勤めの経験もあり、宇野浩二先生の傍近くにおられて、作家と出版社の間にお立ちになることもあったあなたに、解説文のようなものを試みてもらえまいか」

すぐさま拝見した。鵬二氏のいわれる通りの内容である。全集に挿入された月報には諸家が寄せられた新事実のわかる文章もあったし、また、野村尚吾氏のように、『伝記谷崎潤一郎』として集大成されたお仕事もあった。

ところが、これら書簡には、関西移住時代を語る諸家の思い出の文章からこぼれ落ちた事実が出てくる。私信のことゆえ、谷崎氏ご自身がのちに書かれた思い出ふうの文章からも除かれているところも出てくる。関西移住は、関東大震災を逃れるための一策で

もあったが、極端な云い方をさせてもらえば、経済的には大いに不如意で、先生の生涯でもっとも困窮されていた時代でもあった。鵬二氏のいわれる通り、家庭のごたごたもあった。有名な佐藤春夫氏に千代夫人をゆずり、ついで丁未子夫人との結婚、離婚、そして松子夫人との結婚であった。波瀾にみちた十年である。それらの事情も私信ゆえ、雄作氏に逐一報告していらっしゃる。谷崎潤一郎研究者には、よだれの出るような第一級資料の発掘だろう。

だが、私にその任に耐える力があるだろうか。考えこんでみたが、すぐには返答が出てこない。しかしながら、最初の依頼がまわってきたことでもあるし、それに松子夫人のお許しも得ておられることである。先ず、先生の身に起きた女性問題に興味はふかまった。当時の社会事情、関西の世相なども、転々された尋常でない放浪とかさなる。あれこれ詮索してみたい気持も生じたのである。地下の先生から、つまらぬことはやめて、本道の仕事をしなさい、とおっしゃっているお声もきこえるのだけれど、人にまかせておけない執着も生じたことは確かで、当節はまた、文学者の備忘録や、日記や書簡など発掘されると、何らかのかたちで研究者に公表されてしまうことも多い。それならば、

いっそ、という思いも無くはなかった。

また、ここで私だけの思いをつけ足させてもらえば、これら書簡のはじまる昭和二年は、先生が関西移住にようやく安住されようとする時期であるが、その前々年ごろから京都ぐらしが多かった。なかでも、大正十二年十月は、等持院中町に住まわれた。この等持院中町は、衣笠山麓にあった臨済宗天竜寺派の等持院が中心になっていて、私はその寺の小僧だった。もちろん入寺したのは、昭和四年であるから、先生がお住まいになられたのちのことになるが、中町には檀家も多かったので、十七番地のご旧居のあたりはしょっちゅう往還しているし、寺の先輩たちの口に、先生の名ものぼった。それに、昭和三年は御大典の年まわりで、京都じゅうが奉祝行事でさわがしかった。国をあげての祝祭の連続だったが、この前年の三月に、丹後峰山に大地震が起き、四千人近い人が死亡している。関東大震災の復興のメドもつかぬ頃に起きたこの大災害は、関西一円の人々の不安をかきたて、多数の死者の報らせは、暗い気分に陥らせていたのであった。御大典行事は、つまりその一年後なので、私も、そのころは、等持院ではないが、上京区の相国寺にいた。暗い世相と御大典の景気がかさなる世情をまったく知らないわけで

もない。また、これら書簡の後半部になるが、先生は左京区南禅寺下河原町五十二番地に住まわれる。この居宅は、戦後の熱海移住までの最後の関西拠点であった。ここで松子夫人と平穏な生活を得られたわけであるが、そのお宅を敗戦直後に私は何どか訪問していた。宇野浩二氏の紹介で先生に直接面会し、『愛すればこそ』『悪魔』の旧作の刊行許諾を得て、出版している。その節は、私など若者に先生は短時間ではあったが会って下さり、谷崎家の家風といってもよい、東京からきた編集者に、昼食を出して下さったことなどの思い出もあり、そんなことも書簡をよみすすむうちに思い出されたりした。先生は、もちろん、六十歳代のはじめであった。写真やその他で拝見していた、特徴のある丸坊主で、肥満体の風姿をのしのしと、いくらか胸をそらせて奥から応接間へおいでになり、親しくして下さった日々も、今となってはなつかしい。

偶然ごとにしても、昭和二年からその二十三年にいたる書簡は、私に格別の縁を感じさせた。これを機に、貴重な私信ではあるけれども、行間に秘められたご家庭の事情はもちろんながら、何より先生の創作のご苦心の跡を辿ってみることは、今日の私に、よこ道ではなく、本道である気もした。云いわけめくけれど、かりに地下からお叱りをう

けても、この時代に私ももどってみたくなったのである。

思い出しついでにいえば、野村尚吾氏の『伝記谷崎潤一郎』に、等持院時代のことが次のように出てくる。その中に、

京都にはかねてから一度住んでみたいと思っていたからではあるが、大正活映で育った俳優たちが、多くマキノキネマで働いていたので、その近辺を捜してくれたためである。等持院は足利累代の廟所のある有名な臨済宗の寺で、潤一郎の宅は、その門前地区にあたる。（作家水上勉は少年時代この寺で修行したわけだが、それはさらに数年後になる。）

とあり、この家は、家賃四十五円で、二階建だったが、茶畑の中にあって買物一つするにも数百メートルも離れた衣笠村まで行かねばならぬ不便さだった。何分にも焼けだされの避難民だったので身のまわりの品も所帯道具もろくにない生活では、なおさらその不便さが痛感されたろう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「家族一同着のみ着の儘で、十月と云うのに、夫人も義妹の映画女優精子さんも、洗いざらしの浴衣で、五町も離れた衣笠村の銭湯へ通う始末であった。」

と、当時改造社記者だった浜本浩が、『谷崎先生』（昭和二十七年九月「サンデー毎日」新秋特別号）で、その家のことを追想している。

とある。私は「サンデー毎日」の浜本さんの文章は読んでいないのだけれど、この茶畑の中の家というのは知っていて、そのとおりで、いまはなくなった門前通りの北山という豆腐屋のあった角を入ったあたりが十七番地だった記憶がある。衣笠村とよばれていたのは、のちに嵐電が通って等持院停留所が出来るあたりが中心だろう。駅からすぐのところに銭湯があった。浜本さんのいわれる銭湯は、おそらくここのはずで、ここをはずせば、西は竜安寺になり、東は小松原、白梅町になるからである。停留所近辺は、新興住宅地で、映画人めあての貸家も多かった。銭湯を少し下がった地点の畑中には、田坂具隆氏が滝花久子さんと新居をもたれ、また中町には、雲井竜之介、門前に、石田

民三、片岡左衛門、私の知る俳優、監督がおられた。等持院境内には、マキノキネマが撮影所をもっていたので、門前は映画人町を形成していた。それゆえ、谷崎先生が、東京の震災をのがれて、手っとり早く京都に住まわれるとすれば、大正活映との縁もある等持院中町は仮住まいに適当だったろう。野村氏もいっておられるように、等持院は、足利家累代の廟所で、尊氏の墓もあった。そのとおりだけれども、もう一つのつけ足しをいえば、足利尊氏は、当時、国賊の代表で、教科書でも悪者にされていた。その国賊の霊を守る寺という印象がふかく、天竜寺派の別格地で、格式も高いにしては、拝観者（観光とはいわなかった）も少なく、本山の援助や、行政の助けもまったくなかった。本堂も庫裡も、福島正則が建立した当時のままで、破れた土塀、葦の生えた庭園は、時代劇には都合のよいセットだった。当時の住職二階堂竺源師（私たちの師匠）が、牧野省三氏と懇親で、境内の一部を撮影所に貸与され、牧野氏がここに巨大なセットを建設された。この土地貸与代が、等持院の財源になった。今も、墓地には牧野氏の銅像が建立されている。もちろん、境内も本堂も、撮影のない日はなく、私の記憶では、尾上松之助の「忠臣蔵」は、庫裡、書院を一力茶屋にし、本堂を松の廊下、足利家木造の霊光殿前

の太鼓橋は赤穂城にされ、約一週間で撮り終えられている。マキノキネマばかりでなく、松竹、新興キネマ、嵐寛寿郎プロ、のちに東亜キネマ、大ぜいの俳優たちがこの寺に出入りした。松竹の衣笠貞之助氏は、一時、寺内の一室に寄寓され、竺源師と懇ろになられ、檀家総代となり、いまも「小亀家」（衣笠氏の実姓）は檀家で、衣笠という監督名ももちろん、この等持院寄寓の縁からである。このような寺であり、町であるから、谷崎先生には、格別な興味もあったのではないか。そして、この等持院仮住まいが、じつは、関東大震災から逃れての関西入りの第一歩だったのである。

私は大正十年の春、大正活映の「蛇性の婬」のロケーションで久方ぶりに京都や大和地方を訪れてから、上方が好きになつてゐたのであつた。これは西洋かぶれのしてゐた當時としては一寸矛盾のやうだけれども、自分は外人が廣重の繪を珍重するやうな意味で、舊き日本をエキゾテイズムとして愛するのだと、さうまあ自分では解釋してゐた。（『東京をおもふ』昭和九年一月～四月号「中央公論」）

古い町でありながら、エキゾチシズムを満足させる町だったかもしれない。ハイカラなゴルフズボンをはいて、ベレーをかぶった監督や、道具方が、走りまわり、有名な時代劇女優が、洋服姿でダットサンで、撮影所へかけつける。

だが、それにしても、この等持院中町での生活はわずかで、十一月には、東山三条の要法寺内へ移られた。それから、市内転々がつづき、大正十五年には、ようやく、兵庫県武庫郡本山村岡本好文園二号に越されたのである。今、私が読もうとするこれら書簡は、つまり、その岡本移住の時代からはじまる。

二

今月も亦短くて相すみません、

實は京都に靜かな宿を求め、そこに蟄居して一擧に書き上げるつもりでしたが京都は震源地に近いのでやめにしました、目下のところどうも自宅で書くのが一番安全のやうです、その代り春は來客が頻ゝとあるので捗りませんがどうも仕方がありません、

一昨日も亦地震がありました　兎に角當分落ち着かないものとあきらめて居ます、

饒舌錄は御察しの通り口授ですから否應なしにしやべらされましたが「苦樂」の續きものは休みました

中央公論はちよつと今のところ御約束いたしかねます、
今年は普請をするつもりですから洋行する暇はないでせう。耐震家屋でも建てたらば仕事も出來やうと思ひます。關西ばかりか東京の方もいつ又地震が來ないとも限らぬさうです、桑原〳〵

（昭和二年）四月四日

谷崎潤一郎

嶋中雄作様

侍史

井伊君から挨拶の手紙を貰ひました

何卒よろしく

「今月も亦短くて相すみません」というのは、たぶん「婦人公論」に連載中の『顯現』の原稿だろう。四月四日付だから五月号の締切がきて、送稿されたあとこの書簡を出さ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com